

〈平和運動〉の描かれ方

——「ヨイコト」はよくないことが——

内田 友子

一、「ヨイコトヲシテイル」

「デモに参加しながら、街角に立っている自分の処理に、私は戸惑っていた。ヨイコトヲシテイル、善人めいた表情がぬぐえない」のである。

「群像」二〇〇三年十一月号に掲載された林京子の短篇「ほおつき提灯」の中の一節だ。主人公の被爆者「私」は、あるグループの平和運動に初めて参加する。この運動は行進をしない。拡声器も使わない。明りを灯したローソクを一本ずつ持ち、夕暮れ時から夜まで無言で街角に立つ。「沈黙の行動」である。それだけでは道行く人々に趣旨が伝わらないので、戦場の写真や主張を書いたビラを壁にさげる。「私」には、「ヨイコトヲシテイル」という居心地の悪さがともなう。

原爆、あるいは戦争を題材とする小説には、たびたび〈平和運動〉が描かれている。運動（デモ）に限らず、平和を祈念する式

典、モニュメント、資料館、そして〈語り部〉として活動する被爆体験者たち等々、……細かい但し書きを取り扱って手荒に括るなら、小説の中ではこれらは「戦争反対」の意思を示す信号としてまず機能する。だがたいていそこで登場人物は、例えば「ほおつき提灯」のように「私は戸惑っていた」と躊躇し、ときには批判的になる。

そんな小説をいくつも読んでいるとうつかり、平和運動って世間では肩身が狭そうだなあ、とぼんやり考えてしまい、いやそんなはずはないだろう、とあわてて思いなおす。何といつても〈平和運動〉＝「戦争反対」なのだ。肩身が狭くなつてもらつてはたいへん困る。

さて、この静かなデモに対し、「壁や足許の写真に目を向ける人はいない」。こんなものなのか——と「私」は思い、それを察して仲間が「見事に無関心でしょう」という。いや、無関心でない者もいる。

へその下までズボンをさげた黄色い髪の若者が四、五人、私たちの方へ近付いてきた。グループに好奇心を覚えたようだ。平凡に流れる雑踏のなかで、炎に照らし出された中年の一団は、不気味にみえたに違ひなかつた。また、からかうには手頃な対象だつた。

小説の中で〈平和運動〉が疑わしく描かれるのは、いつたなげだらう。

新聞やニュースでは常に必要なこととして報じられ、ユニーグ

な活動なら大きくとりあげられ、学校では平和教育が行われている。「ヨイコト」には違いない。共通認識としても致命的な齟齬はなさそうだ。

だが少なくともこれまで平和運動を礼賛している小説には、一度も出会つたことがない。

政治的な勢力争いが絡むから平和運動が胡散臭くなる、というのがとりあえずは正攻法の解答かもしれない。だがそこまで考えずには胡散臭がついている、あるいは無関心を決め込んでいる人だってたくさんいるはずだ。一九五五年に原水爆禁止日本協議会が発足したが政治的対立によつて六一年には核兵器禁止平和建設国民会議が分離しさらに政党間でもめて六五年には原水爆禁止日本国民会議の分立を招いたままで旧総評系と共産党系が別々に大会を開いているという経緯からもわかるように平和運動とはえてして政治的な権力誇示の道具に利用されてきたので信用できない、したがつて断固「無関心」。

という言い分を平成の若者たちが堅持しているとは、とうてい思えない。もつと誰もが頷ける理由を探したい。

二、「平和運動の効果が分からぬ」

一度聞いただけでは覚えづらい名称の団体がめくるめく勢いで分裂と結成を繰り返していた六〇年代、原爆を題材とする小説の中で、〈平和運動〉もしくは〈平和〉のシンボルはどのように描かれているか。

まず、発表当時に各新聞の文芸時評欄で絶賛された井伏・二の

『黒い雨』（一九六六年、新潮社）。主人公重松を含む小畠村の被爆者たちは、原爆症のため無理な労働ができない。かといって農繁期で村が最も忙しい時に大のおとながぶらぶらしているわけにもいかないので、医者のすすめもあり、重松ら三人は釣をすることにした。「池本屋の小母はん」はそんな彼らを「結構な御身分ですなあ」とからかい、「ピカドンにやられたのを、売りものにしておる」と毒づく。（傍線は内田による。以下同じ。）

「何たることじや、全くほんまに」庄吉さんは小母はんの遠慮のいて行く方を見て、「わしゃあ、むらむらと腹が立つ」と息りたつた。その挙句、釣竿で池の水を搔きまわしながら云つた。

「もう池本屋も、広島や長崎が原爆されたことを忘れとる。みんなが忘れとる。あのときの焦熱地獄——あれを忘れて、何がこのごろ、あの原爆記念の大会じや。あのお祭騒ぎが」

わしやあ情けない」

「おい庄吉さん、滅多なことを口にすな。——おい、魚が来とる、浮子を引いとるじやないか」

文芸評論家たちが『黒い雨』を高く評価した理由のひとつには、それまでの所謂『原爆文学』へ対する批判が多分に込められていて。私は原爆小説というものがすきではない、とはつきり述べる江藤淳はその理由を、「体験と表現との落差がはなはだしすぎて、大概の文学的表現を嘘にしてしまう」、そして「原爆を「知識人」的慣用句でとりあつかうことに軽薄さを感じていた」と説明し、

「しかし『黒い雨』にはそういう空疎さが少しもない」と別格扱いした（朝日新聞夕刊）一九六六年八月二十五日）。また山本健吉は、原民喜や大田洋子について、「未曾有の経験を語り、訴えようとする作者の意図のもつ意義を否定しようとする者はだれもいない」、「そのような経験の記録として、大きな感動を与えた」と、と念入りに断りながらも、「だが、その経験が作者をただちにある特定の政治的立場に結びつけ、その立場からの訴えが折伏的な、ヒステリックな独善性を帯びたとき、読者は血を吸いすぎたヒルのように、自然と作品から離れる」と、既存の作品を手厳しく斬つて『黒い雨』の魅力を照らしてみせた（読売新聞夕刊）一九六六年八月二九日）。

特に大田洋子の作品のよう、政治批判がはつきり示される「原爆文学」に比べ、『黒い雨』では「わしやあ情けない」の一言さえもさらりと竿の先へそらされる。この政治的淡泊さへ向けられた文芸評論家たちの好感の裏には、当時の諸団体のゴタゴタへのうんざり感も作用していただろう。

また、『黒い雨』より少し前に発表された作品に堀田善衛の「審判」がある。「世界」の一九六〇年一月号から六三年三月号まで連載され、原爆を投下したパイロットが戦後の広島で「ワタクシハ……、オニデス……」と叫び平和大橋から転落するというラストシーンで注目されたが、他にもこの長編には日米安保や学生デモ、日本の戦争責任等、当時騒がれた政治問題が盛りだくさんだ。次に挙げるのは、心に傷を負つたまま復員した男、恭助が広島の平和公園を訪れる場面（第四部）である。（傍点本文）

眼覚めて、さっぱりして平和公園へ歩いて行つた。“平和公園”——そうとでも名付けるよりほかに仕方もなかつたであろうが、この町で“平和”とは、なんとも異質な棒をでも呑んだような違和感の感じられたことばであつた。広島がたとえ師団の所在地であり軍事都市であつたとしても、中国大陆の町や村のように戦場であつたわけではない。ただ一瞬の、ただ一発の爆発によつて全市が、お婆ちゃんのことばで言えばさらりつけられ、二十四万以上の死者を出して灰と瓦礫の砂漠となつた——そのあとが、その中心が、“平和公園”であつた。

原爆資料館に対しても、恭助の「違和感」が続く。

新式の、きわめて抽象的な様式によつたらしい原爆資料館は、コンクリートの足の上に、ガラスの鳥籠のようにのつていた。それはもう、呆れるほどに白々しく冷たい、ガラーンとした現代的な建物であつた。なかになまじ資料などなくて、人つ子一人いない本当のがらんどうの建物だつたら、いつそうふさわしく、そのがらんどうのなかに一人立つたら、冷たい汗が流れたかもしれない。（略）なかに入つて、彼は愕いた。陳列された酸鼻におどろいたのではない、掲げられた写真や日本両語による解説つきの図解の、その贈り主の名を見ておどろいたのであつた。

ちなみにこの「贈り主」とは、米国が置いたABC（原爆傷

害調査委員会)である。

次も長編だ。福永武彦「死の島」(文芸)一九六六年一月号(七一年八月号)は、カットパックの手法を駆使した実験的な構成の作品で、いくつもの場面が複雑な順序で進行する。少し脱線するが、「死の島」の登場人物たちは頻繁に「平和運動」のありかたをめぐって話し込む。実によく議論し説明し反論する。それでも足りないのかこの作品では、主人公相馬鼎が書く小説の中、つまり作中作の登場人物たちまでもが延々と論じ合うほどだ。議論が長いからおのずと長編になつてしまつたのか、みつり議論したから長編という形式を選んだのか、作家の意図や事情はわからないが、とにかく「平和運動」に対し言いたいことが山のようにあるという意気込みが静かにみなぎつてゐる作品だ。脱線は以上。前述の相馬鼎が書き進める小説「トウオネラの白鳥」から二ヶ所、引用する。

「広島の人間は決して原爆を使わない、しかし広島以外の人間も原爆を使つてはならない、それを要求できるのは広島の人間だけだ。それを要求するのは我々の義務なんだ。」
「わたしたちはその怖さを知つていても、知らない人たちの心にそれを想像させることは出来ないような気がするの。いくらドームや病院を見せて、その人たちはわたし等のように一度死んだわけじゃないんだから。」
「つまりM子さんはしかたがないと考えるんだね?」

「わたしは平和運動の効果が分からぬと言つてゐるだけ。運動をしないとは言いません。ただ、何とか無駄なことをして

いるように思えるの、Sさんが死んでから。」

「M子さんは誤解していらつしやるけど、わたしと主人とが同じ意見だということはないんです。わたしは平和運動なんて嫌いですし、自分ではやる気がありません。主人が勝手にしているだけで、わたしは人がやる分には反対はしないけど、自分では真平。広島の人間が口を揃えて叫んだって、誰かが原爆のボタンを押すのを止められはしないんです。わたしたちは結局、原爆の時にあんまり無力だったから、その時の罪滅ぼしに今になつて騒いでいるだけなんですね。(略)あの時何にも出来なくて逃げ出した人間が、わたしたちは可哀そな人間だ、わたしたちに免じて原爆はやめてくれ、戦争はやめてくれって叫んだって、死んだ人たちが一体どう思うでしよう?」

最後に、時代は六〇年代から離れるが、林京子の小説「無きが如き」(群像)一九八〇年一~十二月号からも紹介したい。冒頭の「ほおづき提灯」同様、平和運動に対する被爆者「私」の躊躇が表される。平和祈念式典に参加しようとした長崎を訪れた「私」は、若者たちのオートバイの集団を見る。彼らもまた式典に参加するらしく、750(ナナハン)の尻には原水爆禁止、核兵器全面禁止の白布の幟(のぼり)がたてられていた。

：女の頭のなかでは、集団化したオートバイは、暴走する若者としか結びつかない。(略)女には、彼らと、750の尻

にはためく幟がちぐはぐに思える。ちぐはぐさが不安なのだ。

不安に思いながら、女は若者たちの熱気に感動していた。

(略) 人々は自分の問題として長崎に集つて、今日の問題として平和祈念式典に参加しようとしている。女は嬉しかつた。だから女は動かない自分に焦燥を感じていた。それでいて女は、若者や街の熱気に躊躇していた。

以上、〈平和運動〉や〈平和〉のシンボルを描いた作品をいくつか並べてみると、一つの共通点に気づく。〈平和運動〉に対する懷疑や批判、あるいは躊躇といった心情を吐露するのは、戦争もしくは被爆体験者、つまりいずれも〈体験者〉として設定されている、ということだ。六〇年代の政治的対立が招いた〈平和運動〉への不信感を浮き上がらせるためには、このように〈体験者〉が抱く「ちぐはぐ」な感覚を描き出す方法がもつとも有効なのかも知れない。平和を誰よりも強く望むべき立場にある者が抱く〈平和〉への違和感、というアイロニカルな図式は、とりあえずともわかりやすい。

もちろんそこには、戦争体験者の二一ズに応じ得る〈平和運動〉やその種の活動といったものが、果たして可能なのかどうか、という根本的な問題が常に横たわっている。彼らの切実な二一ズは今後の「戦争反対」などではなくて、たぶん六〇年前のあの体験のすべてをリセットしたいという一念に尽きるであろうから。決して果たされ得ないこの悲願の前では、どんな〈平和運動〉もあつもなくなぎ倒されるはずだ。

ともあれ「わしやあ情けない」とか「棒をでも呑んだような違

和感」とか、あるいはそのものずばり、「平和運動の効果が分からぬ」といつた〈体験者〉の不満やぼやきが小説のなかで描かれるたびに、わたしたちの「ヨイコト」がジリジリとなんどなく、よくないことへ押しやられてきたことは、確かだ。

三、「有微化」を考えるための寄り道①

話を次へ進める前に、少しの間、別の話題へ寄り道したい。内田樹のエッセイ集『子どもは判つてくれない』(二〇〇三年、洋泉社)では、「有微化」ということばがわかりやすく説明されている。話題は、「差別」だ。

『チヨコレート』(二〇〇一年、アメリカ)主演のハル・ベリーを紹介する映画評の一文に、内田樹はひつかかる。「今年のアカデミー賞で、黒人の父、白人の母を両親に持つハル・ベリーが黒人女性として初めて主演女優賞を受けて」云々。なぜ「黒人の父と白人の母を両親に持つ、白人女性」とは言わないのか。「それは、アメリカでは「白い」ということが無微的・無垢的という意味であり、「黒い」ということだけが有微的・汚れを意味しているからである」と内田樹は説明する。

ゲシュタルト心理学でよく使われる「向き合つた二人の女の白い横顔」と「黒い花瓶」の絵がある。女の横顔を見つめると花瓶は背景にかき消える。花瓶を見つめると女たちは背景にかき消える。

図と地の反転を決定するのは、「見る側」がどちらを「有

徵」なものとして見るか、その主体の側の「決意」にかかるている。

「黒人」「白人」問題というのは、要するに「どちらを有徵項（汚れ）として見るか」という純粹に「見る側」の決断の問題である。

（人種という物語の賞味期限）

この「有徵化」の仕組みを踏まえたうえで、内田樹は話題を「被差別者の解放」という問題へと進める。つまり、「どうすれば差別をなくせるか」ということだ。

「被差別者の解放」という事業が、ある段階まで「被差別者の有徵化」を戦略としてとらざるをえない、ということを私は理解できる。

「黒人」であれ「ユダヤ人」であれ「在日コリアン」であれ「部落民」であれ、その人が現に受けている差別をはね返すために、「被差別有徵者」としてのポジションをはつきりと示す」ということは必要なプロセスだろう。

しかし、差別の解消ということが、「有徵化するまなざし」そのものの廃絶をめざすものであろうとするなら、「有徵化」の戦略は「どこか」で廃棄されなければならない。

もちろんその戦略は「今すぐ」廃棄できるものではないが、「いつか、どこかで」廃棄されるべきであることは意識しておくことが必要だ、と内田樹は但し書きを添える。

差別をなくすためには何よりもまず初めに、「差別がある」と

いう事実をはつきりと示す必要がある。矛盾するようだが、差別をなくすと運動を続いている以上、差別（の有徵化）は無くならない、ということだ。

小学校の人権学習で初めて「差別」ということばを学んだとき、「教えられなければ（差別）なんて知らないのだし、差別せずにすむのでは」と不本意に感じた人は多いだろう。知った上で、善悪の判断を行なっていくことのほうが実は肝要なのだと理解したのは、私自身それからずっと後のことだ。

差別がなくならないから運動を続けるのか、運動を続いているから差別がなくならないのか……なんだかへたな堂々巡りのようないいこの仕組みは、しかし日常のそこかしこにある。

とにかく〈無くす〉ためには、まず、〈有る〉ことを示さなければならない。

四、「有徵化」を考えるための寄り道②

今年七月二十九日の西日本新聞「社説」では、「現代社会に、被爆体験の継承に背を向けようとする傾向が忍び寄っているようを感じる」として、日本世論調査会が二〇〇一年に実施した意識調査をかいづまんで紹介している²。それによれば、原爆投下を「もう忘れるべきだ」とする意見は13%、核兵器の廃絶や平和運動に「関心なし」と答えた人は四人に一人。「社説」執筆者はこれを受け、「被爆者は、この間一貫して「非核」を訴え続けてきた。なのになぜ、その思いは伝わらないのか」と落胆を示す。

今年は戦後六〇年ということもあって、同じような主張や指摘

はどの新聞やテレビ報道でも頻繁に繰り返されている。「体験の風化」、「記憶の繼承」、「若い世代の無関心」等々……

だが、例えば前者の原爆投下に關する設問に対し、「アメリカの非人道的な行為で許せない」と、「戦争を終わらせるために仕方なかつた」という回答は合わせて76%以上ある。両意見の是非を問う議論はまた別の次元だとしても、少なくとも「忘れるべき」ではないという前提のもと原爆投下について何らかの意見を述べ得る人は七割以上いるということになる。また後者の「関心なし」についても、調査の結果をよく見れば、「四人に一人」というのは二十代と三十代の年齢層に絞った場合で、全世代だとこれが「五人に一人」となる。この数字が「核兵器廃絶」と「平和運動」にとつて実際どの程度致命的なのか、改めて考えるとよくわからない。

と、小意地の悪いいちやもんをつけている理由は、こうだ。

「体験の風化」や「平和運動への無関心」に警鐘を鳴らし、阻止しようとする主張が、一方で「体験の風化」や「平和運動への無関心」を積極的に示す役割を担つてはいいだろうか。つまり、風化た無関心だと繰り返す言説そのものが実は、人々に、いかにも何かが確實に失われ、「戦争反対」という共通認識が一刻と色あせていくような感覚を植えつけてはいいか、ということだ。もちろん本当に色あせているのかもしれない。ちつとも色あせずに形を変えているだけかもしれない。ただ先のアンケートのように、内実はもつと慎重に觀察されてもいいはずだ。

だが、〈無くす〉ためには、まず、〈有る〉ことが前提である。「無関心」を〈無くす〉ためには、まず「無関心」が〈有る〉と

いう事例をわかりやすく示さなければならぬ。そして示されることによって「無関心」は否応なく頭在化していく。……堂々巡りみたいなこの仕組み、だがやはり、そこかしこにある。

五、「似非被爆者」による平和運動のすすめ

本道に戻る。

平和運動に懷疑的な戦争体験者たち、という図式も、ある意味では六〇年代の小説が積極的に築いたひとつのかなりやすさだ。おかげで小説のなかの〈平和運動〉はずいぶん胡散臭くなつてしまつたが、それに真に向から斬りこんだ小説が、平成に入つて登場している。

足立浩二「暗い森を抜けるための方法」（『群像』一九九三年六月号）は、平和運動のありかたや被爆体験を語り伝えること等、現在的なテーマを描いて群像新人文学賞の優秀賞を受けた。二十代前半でこの作品を発表している作者が「原爆を直接知らない若い世代」（田久保英夫）であつたことも注目された理由のひとつだ。

広島市の大学に通う主人公ナミは、平和運動や環境問題に取り組むサークルに所属している。ナミの祖母の教え子である米田正吉は、すすめられるままに彼女らの集会に参加するが、途中で退席してしまう。理由を問うナミに米田は、「あれ以上は聞いて居られません。私にはあの人達が自分の楽しみでやつてているようにしか思えないのですから。」と厳しく答える。

米田正吉は「似非被爆者」である。一九四五年八月五日、八歳だった米田は些細なことから家出した。彼を捜すために母は弟を

背負つて翌朝早く広島市へでかけ被爆、死亡した。そのことへの負い目から、米田は被爆体験がないにもかかわらず、自分は当日母や弟と一緒に被爆し、ひとりだけ生き残つたのだと嘘をつき続けていた。隠していた事実を恩師とその孫娘ナミに打ち明けた夜、米田は平和記念公園内で焼死する。

このように屈折した被爆願望を持つ米田は、先の集会のあと、親子ほど歳の離れたナミに向かつて次のように語る。

「例えば被爆者でない人がどれだけ自分の想像力を逞しくし、彼らと寄り添つていると感じたとしても、また彼らのためにどれ程尽力したとしてもね、被爆者ではないという絶対的な溝は埋められないでしよう。被爆者でない人が被爆者のために運動することは、どうしても被爆者の人をその矢面に立たさざるを得ない偽善を生みますね。そのことを忘れて、安易に同化すると、その偽善を正義という美名で塗り込めてしまつて、自分達を疑うことを忘れててしまうものなのです。戦争は外から来るのではなく、中から起るのですから。私はどのような運動も自分の偽善性を見失うことなく、それでも続いてくれることを望んでいます。」

またナミの母は、「被爆者的人が望みもしないのに、私達の方が自分達の正義の絶対的根拠として被爆者という聖域を作つてしまつたのじやないかしら」とも語る。

この受賞作品は選評で、「テーマも文体も、この種の正論的、啓蒙的であり過ぎた」（後藤明生）という苦言も出たほど、この

ように登場人物たちによる説教（？）や議論が度々繰り返される。だが注目したいのは、〈平和運動〉の背負い込んできた胡散臭さが、ここでは六〇年代から引きずる政治性の問題とは異なる側面から説明されている点だ。〈被爆者でない人〉の正義の根拠〉という観点から〈平和運動〉を照らし出すことによつてこの小説は、問題視されている「無関心」の内実を丁寧に切り開いて見せようと試みる。

小説の最後で、ナミは次のように決意を表明する。

「サークルの会報に、米田のおじさんが私に話して下さった、運動をする人間は偽善性から逃れられない、それと格闘し統けなければならないということを書こうと思うの。」

「ほおずき提灯」の主人公が、「ヨイコトヲシテイル、善人めいた表情がぬぐえない」のである。」と戸惑うのも頷ける。〈平和運動〉は、戦争体験者たちの根源的な切望に決して報いることができないと現実との「格闘」を、果てしなく強いられる。その現実に自覚的である者ほど、残念ながらこの「格闘」における勝ち目は無い。負けがこむ勝負なら、誰だつておよび腰になる。

小説のなかで〈平和運動〉がいつも批判的、懷疑的に描かれるのはなぜだろうと、前からぼんやり考えていたことを過日原爆又は研究会で話してみた。〈平和運動〉には明確な着地点（＝達成

たとえそれが、どんなに肩身の狭い役回りであろうとも。

点 や手ごたえがないというあたりからその疑わしさが立ちのぼつてくるのではなかろうかと述べたところ、〈平和運動〉とは続けることに重点があり、そもそも着地点を求めるといった性質のものではないのでは、という意見が出された。

そういうえば先の「暗い森」でも、サークルのパンフレットに書かれる勇ましい決まり文句に、ナミ自身ひつかりつつ、「そのように書くことで中々目に見える成果の上がらない運動を持続していくことをそれぞれが確認しているようなところもある」と是認している。

なんだかまるで、生コンクリートを回し続けるミキサー車のようだ。とにかく止めてはいけない。固めてしまつてはいけない。

そして六〇年でも百年でも、車体は移動し続けなければならない。「無関心」を有効化することによって〈平和運動〉を支えることができるのなら、やはりそれは車体を動かすひとつの戦略として有効なのだ。

注

堀田善衛「審判」の引用は『日本の原爆文学⑥』（ほるぶ出版、一九八三年）、福永武彦「死の島」の引用は『死の島』下巻（河出書房新社、一九七一年）、林京子「無きが如き」の引用は『日本の原爆文学③』（ほるぶ出版、一九八三年）による。

1 「黒い雨」は、「新潮」一九六五年一月号～一九六六年九月号に連載された。ただし、連載開始から一九六五年七月号までの題は「姪の結婚」、翌八月号より「黒い雨」と改題している。

2 この調査結果は中国新聞のホームページでも確認できる。
<http://www.chugoku-np.co.jp/abon01/abon/yonan/yonan.html>（二〇〇五年八月現在）。